

【研究ノート】

江戸時代の展覧会準備の様相

―「柴田義董追福書画会」の例―

江戸時代後期には、現役作家の作品を集めて展覧する会が多く開催されました。そのなかには、物故者の冥福を祈ることを目的とした会もありました。本稿では、そのような展覧会のひとつである「柴田義董追福書画会」における開催準備の様子についてわかったことをご紹介します。

柴田義董(1780～1819)は現在の岡山県出身で、京都に出て絵を学び活躍した絵師です。京都や大阪でその画風が好まれた呉春(1752～1811)の門人として知られています。衣の部分などには勢いのある線描を用いながらも細部を繊細に描き出した、情趣あふれる人物画が多く残っています(挿図1「妓女図」柴田義董筆、岡山県立博物館蔵)。絵師の伝記を集めた『古画備考』という書物には、記憶力にすぐれていたため手本を用いなかったという逸話が採録されており、天才肌の人物だったとも想像されます。数えて四十の年に亡くなり、惜しまれました。

義董が亡くなったのは文政二年(1819)ですが、「柴田義董追福書画会」は十七回忌にあたる天保六年

(1835)に催されました。この追福書画会の存在を現代に伝えてくれる史料は、大勢の人に会の開催を周知するために作られた引き札です(挿図2)。この史料から、京都の円山公園の辺りにあった宴会場の左阿弥春雲楼で、天保六年三月二十八日に催された会だったとわかります。義董の息子である義峯が中心となって執り行い、現役絵師たちの作品を集めた展覧会だったようです。興味深いことに、この追福書画会のための制作を頼まれたという記録が、原在中(1750～1837)に始まる絵画の一派である原家の文書に残っています。京都府立京都学・歴史館所蔵の原家文書の中には、『臥游集』と表紙に書かれた原家の注文台帳が四冊あり、現在も全文の翻刻が進められています。注文台帳にはおもに、日付・画題・材質・依頼主が書き込まれ、ときに寸法や作品制作の目的なども記録されています。

『臥游集』一冊目の天保六年三月六日条には唐紙三枚という材料の記述に続き、「奉童籠之図 右ハ柴田義董追福二付在中在明在照画額ニ来ル」(原本ルビなし)とあって、依頼主の名は「山田竜淵」と記されています。在中・在明・在照はいずれも原派の絵師の名です。また、三月十六日には五つの画

題(梅画・捧童籠図・竹・大原女・黄熟香図)とそれぞれの作者名(在中・在明・在親・在謙・在照)が記され、やはりこれらが義董の追福に関連する依頼である旨と、依頼者と見られる山田竜淵の名が書き込まれています(「翻刻原在中『臥游集』」『朱雀』34、2022年)。三月六日に追福書画会のための絵画制作について打診があり、十六日に詳細を決定した、あるいは完成作を納品したものと見られます。六日の依頼の段階では三名が指名されましたが、十六日にはそこに在親と在謙も加わっています。原派の絵師が絵出で義董の冥福を祈っているようですが、書画会への出品は大勢の人に作品を見てもらふ機会である点に鑑みれば、貴重な機会を逃さないたたかさ捉えることもできるかもしれません。

依頼主の山田竜淵(生没年不詳)は、はじめ山本探淵(1750～1837)に学び、義董の門人となった絵師です(『皇都書画人名録』吉田順祥編、1847年刊)。先に紹介した義董追福書画会の引き札にも、主催者の一員として名が見えます。現在ではあまり著名ではない竜淵ですが、安政二年(1855)造営の京都御所御常御殿の杉戸に絵を描いており、当時はその実力が認められた絵師だったようです(挿図3「王賀困菴図」山田竜淵筆、京都御所)。原在中も若い頃は山本探淵

に学んだと言われているので、在中と竜淵は早くから見知った間柄だった可能性があります。元々知り合いだったため、竜淵が原派の絵師への依頼を行ったのではないのでしょうか。絵師が知人の依頼を取り次ぐ場合などに、別の絵師に発注していたことを示す江戸時代の記録はしばしば見られます。『臥游集』一冊目における他の例では、山田竜淵が新潟の田野持権蔵なる人物の依頼を取り次いでいたり【天保五年七月十九日】、西本願寺の衝立制作の依頼を吉村孝文(1792～1863)という絵師が取り次いだり【天保五年正月二十九日】といった記録もあります。

「柴田義董追福書画会」の引き札と原家の注文台帳を合わせて見ると、制作の依頼から実際の制作までの過程や日数の間隔が少しだけ明らかになりました。絵の完成後には、掛け軸の形に仕立てる必要もあるので、実質一週間程度で制作が行われたと見なせます。また今回の例は、当時の絵師たちの横のつながりを示すひとつの手がかりともなるでしょう。(仁方越洪輝) ※挿図1は『京都画壇の一九世紀文化・文政期』(思文閣出版、1994年)、挿図2は『書画展観目録集成景印冊下』(青雲堂書店、2017年)、挿図3は『京都御所障壁画―御常御殿と御学問所―』(京都新聞社、2007年)より転載しました。



図1

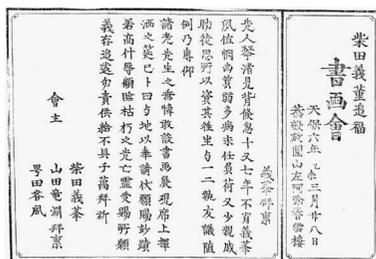


図2



図3

季刊 美のたより No.223

令和5年6月30日

発行 大和文華館